

「若葉の頃」を思う

昭和48年当時は、構内のあちらこちらに学生たちの主張が色鮮やかに描かれた看板が立ち並んでいた。入学式のあと会場を出たところで高校の先輩に声をかけられた。式で学歌を歌っていた先輩だ。断る理由もなくそのまま私は香川大学合唱団に身を置くことになった。

当時の合唱団は百人を超える大所帯で中国四国地方の大学の合唱団との交流が盛んだった。組織や役割分担がしっかりしていて、先輩が後輩をととても大切にしていた。行事や練習の計画がきちんと組まれ、L10番教室や学館の2階でよく練習したものだ。団内には技術者部会があり、学生指揮者を中心に高いレベルを保ち、全国大会では銀賞を勝ち取った。団員の敬愛を集める顧問の大出孝祐氏（現 香川大学名誉教授）が合唱団のために作った数々の曲は今も愛され歌い継がれている。現在の学歌も氏の手によるものである。

音楽研究室では生涯の友を得た。教官は手加減なく高い技術求め、私たちは皆が並んで進めるように色々と助け合い絆を強くした。無論、技術は時間をかけて自分で磨くしかない。3階建ての音楽棟には小さな練習ボックスがたくさんあり、他の研究室の学生も赤い表紙の教則本を抱えて練習に励んでいた。ピアノが苦手だった私は合間を見つけてひたすら練習した。遅い時間になってしまったときには、守衛さんに一礼して自転車で門を走り抜けた。

研究室でのハイライトは大学祭だ。ギター・マンドリンクラブとの合同で、当時流行っていたダニエル・リカーリの「ふたりの天使」を演奏した。普段は交流のない組み合わせで音楽を作り上げた素敵な夕べのことは生涯忘れない。自分の知らないところで実行委員会のみなさんが動いてくださったことに、改めて手を合わせたい。

恩師からは、自分に厳しく向き合うことを、先輩や仲間から「仲よきことは美しき哉」ということを学んだ4年間だった。公立中学校を退職して8年が過ぎ、私は44年続く地元の合唱団の指導をしている。あの学祭の感動は、みんなと一緒に歌うことを求めて、今も心を動かさせている。

（教育学部 昭和52年卒業 高井留美子）